

2018年2月11日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「聞け」

聖書：マルコによる福音書7:31～37

昔の諺に「三猿(見ざる聞かざる言わざる)」がある。孔子は三猿を「不道德なこと、反社会的なことを見たり、聞いたりしてはならない」という道徳的な意味で解釈した。聖書にはこの三猿のことは直接記されていない。ただそのような思想的な言葉は多く見る。箴言に世の中の不法な物事に目や耳を奪われることなく、神の言葉に目と耳を傾け、不法な言葉を慎むようにとの言葉を見ることが出来る。孔子の言う解釈と通ずるものがあるようだ。

その中で、今朝の箇所との関連も含めて、イザヤの言葉を見る。《行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな、よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし、耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく、その心で理解することなく、悔い改めていやされることのないために》(6:9,10)。ここはイザヤが度重なる戦争、捕囚、大国の脅かしの中で、真理に対して目を閉ざし、悪いことが行われていても目を閉ざし、神の言葉に耳を閉ざし、苦しむ人の叫びや訴えにも耳を閉ざす人々。イザヤはその不義がまかり通る世の中に対し、怒り、また人々を勇気づける意味でこのように語る。

また、《そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで、荒れ地に川が流れる》(35:5,6)。イザヤは捕囚の民からの解放の預言を、こういう表現で言い表す。支配権力へのおびえの中で、「見ざる、聞かざる、言わざる」を決め込んでいた人々が、その状態から解放されることを意味している。

イエスは、「開け」と言う。「治れ」「良くなれ」ではない。そこにはきっと、肉体の癒しだけでなく、社会の中で閉ざされた思いでいた人が、開かれていく、開かれていいんだ、開かれよ、とイエスがおっしゃっているように思う。

「開け」は、私たちにも語られている言葉であろう。耳が聞こえない、話せない人と共に生きる時、社会の中で小さくされた者の側に向き合う時、私たちの側が、開かれず、閉ざしていることはないか。開かれるべきは、私たちの側ではないのか。(神谷)